二人。家庭科授業【銀×土】

蒼威薔薇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
二人。家庭科授業【銀×土】

【Ｎコード】
Ｎ３２４９Ｐ

【作者名】
蒼威薔薇

【あらすじ】
家庭科授業。
料理が下手な土方は
放課後、銀八に教えてもらうことになる。
二人きりの家庭科室―

（前書き）

完全腐女子向けなのでご注意ください（・ω・）

―3年Z組の教室―

いつも黒板じゃなく、銀八を見てる。

あ、字が間違ってる。・・クス

なんでかって？知らねぇよ。そんなこと。

二人。家庭科授業

―キーンコーン―

「はーい。これで授業終わりぃー。」

いかにもだるそうな銀八の声がした。

「あ。そうだ、土方。あとで職員室に来るように。」

「はぁ？なんでだよ。」

「次家庭科だから準備手伝うようにー。」

「なんで俺・・・。ハァ。わかりましたー」

って事は2人きりか・・？って俺何考えてんだ・・・

そんな事を考えながら職員室に行った。

職員室に着くと、銀八は

もう家庭科室に持っていく材料はもう用意をしていた。

「遅いぞ。さっさと行って準備するぞー。」

―家庭科室に続く階段は、俺と銀八

二人だけの足音だけが響いていた。―

「ふぅ。やっと着いた。この学校無駄にでかいんだよなぁ。・・・って土方？」

「・・・・・・。」

「おーい。聞いてんの？」

銀八が必要以上に顔を近づけた。

「なっ！／／ちゃんと聞いてる。」

クソ。緊張して全然話せねぇ。

「・・・なぁ。もしかしてお前緊張してんのか？」

「なっ！！バッバカ言うなっ／／きっ緊張とかするわけねぇだろが！！／／／」

「（（ニヤ　なぁに咬んでんの？　　あ。なぁお前が今日調理自習で作るやつ俺に食わせろよ。」

「ハ？！冗談じゃねぇよ！！誰がお前になんか食わすか！！／／」
・・第一俺は料理が苦手なんだよ。」

「なんだ。そんなことか？それじゃ、放課後先生と一緒にしますか。」

「なっ・・・！！！！！！！！」

「んじゃそういうことで。もうすぐ授業が始まるぞー。」

「まっまだ何も言ってねぇよ！！！！」

―やべぇ。うれしすぎる。
はやく授業が終わればいい。

―放課後―

「ったく・・。なんで俺がお前みたいな教師と調理自習しなきゃいけねーんだよ。」

「んなこと言って本当は嬉しいんだろ？（（クス」

「ちょっ！！／／なに言いだすんだよ！！！もっもうさっさと始めるぞ！！！！／／／」

ズバズバと俺の心の中を
読まれていく・・。

「んじゃ、始めるか。　はい。まずーチョコを刻みまーす。」

「ちょっ！なんでチョコなんだよ！！」

「え？俺が好きだから。」

「なんだそれ！」

「つべこべ文句言ってないでほらやるっ。」

銀八に包丁を持たされた。

「千切りな。」

千切り・・？なんだそれ。・・・・こんな感じ？

「あぁー。危なっかしい。千切りはこうだって。」

銀八に後ろから手を回され

俺の手の上に銀八の手が重なった。

吐息や声が耳元で聞こえる。

「ん。できたっと。次は溶かすなー。」

ブルブル・・ブチャッッ

うわっ顔と手にチョコが付いた。

「ブハッ　なんでチョコ溶かすだけでそんなに汚れるんだよ。」

「わっ笑ってんじゃねぇ！！だから苦手なんだって言ってんだろがっ／／」

「しゃーねぇな。」

ペロ・・

「あっ／／／」　ビクッ

銀八の舌がチョコが付いたほうの頬に触った。

「ちょっ／／何してんだよっっ」

「何ってチョコがついたから綺麗にしてんだよ。」

ちゅ・・

「んっ／／」　ピクッ

「何赤くなってんだよ（（クス」

「ばっ／／っち違っっ　ぁっやめっっ／／」

静かな家庭科室に
二人の声だけが響く。

こっこんなんじゃいつまでたっても
チョコが完成しねえじゃねえかっ／／

「続けて。次は型に流し込む。」

耳元で聞こえる銀八の声に
ピクっと震えた。

「つっ・・次は・・・・？」

土方は消えそうな声がで言った。

「次・・？次はもう固まるのを待つだけだし。」

「え・・・・っ。」

ちょっ。じゃあそれまで何すんだよ。

「なぁ。今何考えた？（（ニヤ」

「なっ／／／べっ別になにも考えてねぇよ／／／」

銀八は土方の手首を掴み
壁に押しつけた。

「なぁ・・土方。俺の事好き？」

真剣な紅い瞳。

「なっなんでそんなことっ／／／」

「ほら。言えよ・・。俺の事が好きだって。」

ビクッ

「ばっ／／首はっっ　ぁっ／／／」

「可愛い奴だな（（クス」

もっもう耐えきれねえっ

「もうチョコ固まったんじゃねえかっ！？」

「・・そうだなー。見てみるか。」

たっ助かった・・。

「固まってる。完成だな。」

思ったよりもうまくできていた。そりゃチョコ刻んで溶かして型に流し込むだけだから簡単だろうけど。

「んじゃ、あとはトッピングだけだな。」

「もっもう先生は帰っても大丈夫です。」

「あん？なんだよ。」

「いいから帰れって！！あとは一人でするからっ」

「わぁったよ。んじゃ、あとは頑張れよ。」

―銀八のスリッパの音がどんどん遠ざかっていく―

「・・・・・。」

―１５分後―

「できた。」

もう帰ってんだろうな。明日渡すか・・。

家庭科室を出たその時
銀八が家庭科室のドアの前に座っていた。

「なっなんでいんだよ！！」

「だってよー、お前のチョコ早く食いたかったから。」

「・・・ん。」

ラッピングしたチョコを
銀八に渡した。

「あっ味の保障はねぇからな！！」

言葉と同時に走ってその場を立ち去った。

「おいっ！・・・ってもういねぇし。」

銀八はラッピングされたチョコを開けてみた。

「フハッ」

―好きだ―

チョコに書いてあった。

「文字ホワイトチョコじゃなくてマヨネーズってありかよ・・・。」

パク

「土方・・・　俺も。」

〜END〜

（後書き）

初小説だったということで、
あまり自信がなかったのですか・・w
どうだったでしょうか（・ω・、）
楽しんで頂けたのでしたら幸いです（´ェ、＊）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3249p/

二人。家庭科授業【銀×土】

2010年12月6日00時26分発行